

漢法苞徳塾資料	No. 179
区分	疾病・病証
タイトル	『素問』玉機真蔵論第19 (王冰の註) 脈・病証の大過と不及
著者	八木素萌
作成日	1991.07.16

◎『素問』六節蔵象論第9(清・汪昂の註)と『素問』玉機真蔵論第19(王冰の註)と対比して検討すると、「六節蔵象論」は運氣の「大過」と「不及」の病機論を記述しているが、

- (1) 例えば「木氣」の「大過」の場合には「侮肺」と「乘脾」という「木」の「大過」状態という病機が表現されている、すると『「木」を瀉す』だけで良いのであろうか？
 運氣的には「木」の「大過」とは、「水」の不及に他ならない。病証的に見れば、「水」の不及為に「木の過」となっているのでなければなるまい。とすれば、「木」の「瀉」を「瀉火」として行なうのか？「水」不足で「木」が乾いたのなら「木」の「大過」は虚象に過ぎない事になる。すると、これもまた、『瀉火補水』が適当という事になる。病証的にはこの「木実」とは「病の大過」を来たしている「邪実」である。ところが、「木大過」の運氣では「木の侮肺と乘脾」で「金・土」が同時に「病」むと注釈されている。
- (2) 「不及」の場合には「木制」の無い「土」は妄行して「水」臓＝「腎」に病を生じさせ、「金」の「賊」剋を「木臓」＝「肝」が受ける事になる。それは益々「土」への「木制」を弱めるので「土の妄行」を益々強めるように作用する。これは、まさに「瀉火補水」そのものである。具体的には『「水」を瀉して「土」を補す』＝(金の賊剋を問題点と見ている場合)事になるか、『「金」を瀉して「火」を補す』＝(土の妄行が問題点と見た場合)事になるか、どうも釈然としない。具体的な病証論が必要である。
- (3) 「大過運氣」とは「未至而至」であり「不及運氣」は「至而不至」であるとするのが「六節蔵象論」の記述、「其氣来実而強 此謂大過 病在外」「其氣来不実而微 此謂不及 病在中」と言うのが「玉機真蔵論」の記述で、季節の旺氣する蔵の「病脈」を述べている。かなり「六節蔵象論」とは趣を異にしている。
- (4) 「玉機真蔵論」は五臓の基本脈状を記述した後、「大過」「不及」に言及する。
- 肝 …春脈如弦…
 …春脈者肝也 東方木也 萬物之所以始生也 故其氣来 稟弱輕虚而滑端直以長 故曰弦 反此者病
 …其氣来実而強 此謂大過 病在外 其氣来不実而微 此謂不及 病在中

心 …夏脈如鉤…

…夏脈者心也 南方火也 萬物之所以盛長也 故其氣來盛去衰 故曰鉤 反此者病
…其氣來盛去亦盛 此謂大過 病在外 其氣來不盛去反盛 此謂不及 病在中

肺 …秋脈如浮…

…秋脈者肺也 西方金也 萬物之所以收成也 故其氣來 輕虛以浮 來急去散 故曰浮
反此者病
…其氣來毛而中央堅 兩傍虛 此謂大過 病在外 其氣來毛而微 此謂不及
病在中

腎 …冬脈如營…

…冬脈者腎也 北方水也 萬物之所以合藏也 故其脈來 沈以搏 故曰營 反此者病
…其氣來如彈石者 此謂大過 病在外 其去如數者 此謂不及 病在中

脾 …脾脈者土也 孤藏以灌四傍者也……善者不可得見 惡者可見

…其來如水之流者 此謂大過 病在外 如鳥之喙者 此謂不及 病在中

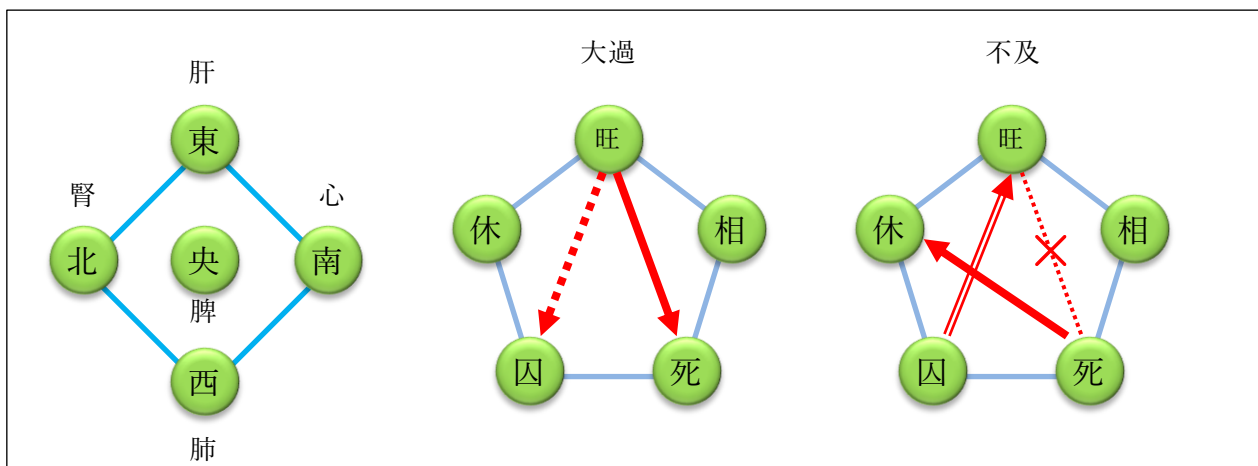
※ 75 難は土を中央に位置するものとしている。

玉機真藏論 五藏大過不及病証表

五臟	大過	不及
肝	善忘 忽々眩冒而巔疾	胸痛 引背下 則兩脇脹滿
心	身熱而膚痛 為浸淫	煩心 上見欬唾 下為氣泄
肺	逆氣而背痛 慍々然	喘呼吸少氣而欬 上氣見血 下聞病音
腎	解僂 脊脈痛而少氣 不欲言	心懸如病飢 眇中清脊中痛 少腹滿 小便變
脾	四肢不舉	九竅不通 名曰重強

7 5 難圖

玉機真藏論大過不及圖

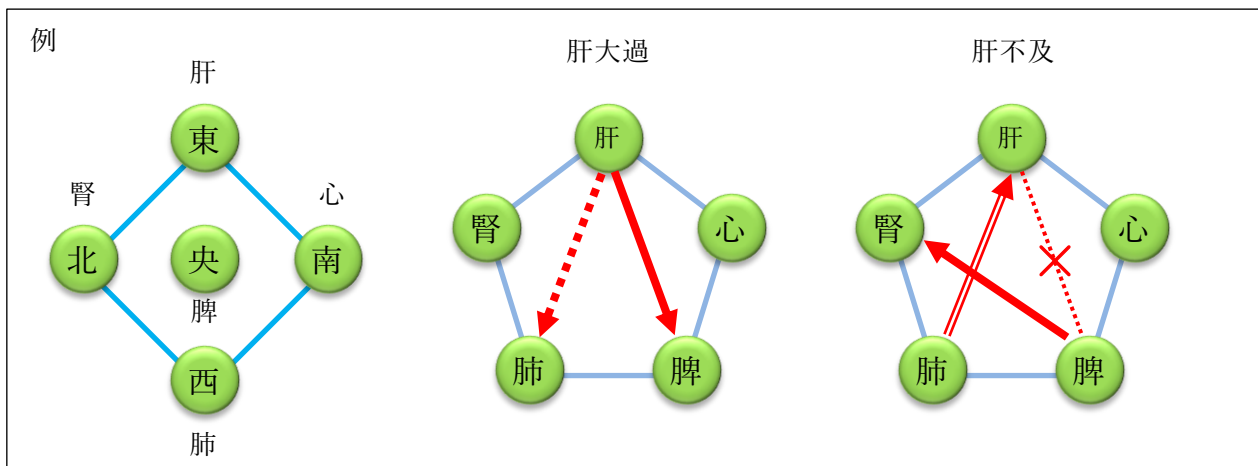


大過

不及

- 旺乘死
- 旺侮囚

- 旺不制死
- 死妄行休
- 囚乘旺



肝大過

肝不及

肝實肺虛者
南方瀉北方補

- 肝乘脾
- 肝侮肺

- 肝不制脾
- 脾妄行腎
- 肺乘肝